

当センターでリハビリテーション治療を受け社会復帰された方々 (Role model:1~9)

Role model:1

せのお のりゆき

妹尾 利幸さん 昭和 52 年生まれ **脊髄損傷(頸髄損傷) C5 レベル**

大学生の時転落事故で受傷し、復学の道を探って当センターに転院となりました。

リハビリ治療、家屋環境整備を行い、約 1 年 2 ヶ月後に家庭復帰し、現在、当センターの外来に通院中です。

一時期、当センターのホームページの管理をお願いしていましたが、現在は一般企業に就職し、コンピュータを使用して在宅で就労されています。

また、妹尾さんがお勤めの会社へ新規で就労される障がい者の窓口として人事にも関わり、会社でも重要なポジションを担っています。

年 月	出 来 事
1998.8	転落事故により受傷 頸髄損傷(C5)と診断される 中国労災病院に入院、手術
1999.6	医療リハに転院
2000.8	リハビリテーションを終え退院 家庭復帰
2001.4	職業リハで遠隔訓練を受ける
2005.4	医療リハ相談室メールマガジン編集 ホームページ管理担当に
2011.1	(株)NTTデータだいち勤務 (在宅勤務)



Interview

インタビュー

【近況】

現在の会社に勤務をはじめて以来、日々緊張感の中精勤しています。休日は運動しなければと思いつつ、思うだけで出来ていない自分に反省…

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

最初の入院以降10年以上お世話になっていますが、その都度適切なアドバイスをいただき、安定した社会生活を送る上でのサポートを受けられていることです。

【今後、当センターに望むこと】

今後も高度な知見と高い専門性で、日本のリハビリテーションの先導役を担っていただきたいと思います。

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

一人一人違う残存機能とリハビリの「ゴール」。「何をどうすれば？」の入り口から、「目指すゴール」の出口までのフォローが医療リハでは受けられます。時として孤独なりハビリですが、家族、あるいは同じく入院されている患者さんと励まし合いながら頑張ってください。

【その他、リハビリテーションに関して思っていること】

リハビリとは、運動機能を取り戻すことだけでなく、戻らない機能を補う器具・装置を考えることも含まれるということを最近考えるようになってきました。でも、どちらも難しいものです。



Role model:2

とくまさ こういち

徳政 宏一さん 昭和 42 年生まれ **脊髄損傷者(頸髄損傷者) C8 レベル**

交通事故により2004年に受傷されました。家庭復帰、職業復帰へのアプローチを目的に、受傷後7か月で当センターに転院となっています。

ADLが自立し、自宅の改造も終了した段階で家庭復帰され、その後は就業されています。

当センターでリハビリテーション治療を受けられた脊髄損傷の方々の集まり「KIBI は一とふるFAMILY」を立ち上げたり、特定非営利活動法人広島頸髄損傷LifeNetを設立したり、多方面で活躍されています。

年 月	出来事
2004.11	交通事故により受傷、第6頸椎脱臼骨折、頸髄損傷C8と診断される JA広島総合病院・広島市立安佐市民病院へ入院
2005.6	医療リハ転入院
2005.10	住宅改造開始
2006.1	医療リハ退院・患者会【KIBI は一とふる FAMILY】立ち上げ代表に就任
2006.5	車椅子マラソン開始
2006.6	就職先決定
2012.11	特定非営利活動法人広島頸髄損傷LifeNet設立、退職、車椅子マラソン中断
2017.2	今後のQOLを考えてストーマ(人工肛門)造設
2017.3	特定非営利活動法人日本頸髄損傷LifeNetに法人名変更し現在活動中 http://www3.hp-ez.com/hp/k-solifenet/ 講演活動・頸髄・脊髄損傷者支援活動など

Interview インタビュー

【近況】

あっという間に10数年が過ぎていました。最初は右も左も分からず自暴自棄になり涙を流す日々でしたが、車椅子生活になって出会った多くの方々に支えられ、助けられここまで来ました。現在はNPO法人で頸髄・脊髄損傷者の生活や思いを多くの方々に知っていただく為、講演活動や今まさに悩んでいる患者さんの支援活動などをしており充実した毎日を過ごしています。

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

医療リハに入院して仲間、家族、先生、医療スタッフの方々と繋がる事が出来た事、何でも語り合った事、それが10数年経過しても色あせる事なく今でも続いている事。そして障がい者としてだけでなく、一人の社会人として生きる基本を入院して日々積み上げた訓練や仲間や医療スタッフの方々との生活から沢山教わりました。

【今後、当センターに望むこと】

これからも私たちのHOME(我が家)として頑張っって欲しい、私たちはいつでも応援しています。

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

【継続は力なり】古い言葉！ってバカにしてたけど、これがかなり難しい、でもこれが一番の近道です。色々思いや不満、不安もあるとは思いますが、まず日々継続して行く事、患者会【KIBI は一とふる FAMILY】はいつも応援しています。



24時間テレビ収録の時に家内とミュージシャンの森恵さん

松永 仁志さん 昭和 47 年生まれ 脊髄損傷者 T3 レベル

日本のトップアスリートであり、お名前をご存知の方も多いと思います。

高校生とき 17 歳で受傷し、当センターでリハビリテーション治療を受け、高校に復学しました。

高校卒業後は吉備 NC 能力開発センターにて職業訓練を受け就労されました。

この頃に車椅子の陸上競技に出会い、才能を伸ばし仕事を辞めて陸上競技に専念し北京、ロンドン、リオデジャネイロパラリンピックの 3 大会に出場されました。

リオデジャネイロパラリンピックでは陸上チームの主将を務め、現在も第一線で活躍しています。

2016 年、日本で初の車椅子陸上の実業団チーム「WORLD-AC」を設立され、後輩の育成にも力を注がれています。

年 月	出来事
1989.9	交通事故による受傷 市内の病院へ運ばれ手術を受ける 第 3 胸髄完全損傷と診断
1990.3	リハビリの為に医療リハへ転入院
1991.4	吉備NC能力開発センター入所 同じくして吉備高原ふれあいロードレースに初参加、当時 5 km を走るのが精一杯だった
1995.4	ゼノーテック株式会社入社 陸上競技も少し本格的に始め出した頃
2005.5	仕事を辞め陸上競技に専念、同時に職業リハの非常勤講師も務める
2008.9	北京 パラリンピック出場
2012.9	ロンドン パラリンピック出場
2013.3	職業リハの講師を辞め、株式会社グロップサンセリテと所属契約
2016.3	日本では初となる車椅子陸上の実業団チーム「WORLD-AC」設立 選手兼監督として活動
2016.9	リオデジャネイロ パラリンピック出場 陸上チーム主将を務める



Interview

インタビュー

【近況】

現在はプロのアスリートとして活動し、同時にチームを牽引しながら選手の育成強化を行い、世界で戦えるスポーツチームのマネジメントを行う。また、各地で様々な講演やセミナーを行っている。

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

当時、何も情報がなかった私自身に、様々な可能性を見出す切っ掛けとなった。単にリハビリと言う事だけではなく、多くの方と出会う事により、知り得る事が何より大事だったと思います。

【今後、当センターに望むこと】

社会復帰は単にADL[activities of daily living]を向上させる事ではなく、社会で生き抜く精神的な強さを見出してこそ、復帰に至る。私はスポーツを追求する事により、厳しさも楽しさも、向上心も学んだ。そういうMUSTなオリジナルをセンターで展開して頂きたい。

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

障がいを負うという事は、やはり肉体的にはマイナスであります。しかしそのマイナスを補うプラスを身につける事によって、我々は社会で輝く事も勝ち抜く事も出来る。社会の厳しさは、実は健常者も障がい者も変わらない、どう受けとめて、どう理解するかだと思う。どうせ生きるなら、やりたい人生を送ろう！その為には努力を惜しまない事です！

【その他、リハビリテーションに関して思っていること】

失った機能、もしくは弱くなった機能、これを補うのは他の正常な「並」でない能力の向上。機材や補助具に頼り切るのではなく、本来の能力を最大限に高める事こそ、将来的につながるリハビリかもしれません。



S. Sさん 昭和 49 年生まれ 脊髄損傷者(頸髄損傷者) C4 レベル

2009年にアメリカで交通事故に遭い受傷されました。

ワイオミング・メディカルホスピタルで手術を受け、その後日本に戻り東京厚生年金病院、広島市総合リハビリテーションセンターを経て、当センター入院となりました。

入院中は起立性低血圧との戦いでしたが、持ち前の明るさと努力で乗り越えられ、職業リハビリテーションセンターの職業訓練終了後に就職されています。

年 月	出 来 事
2009.6	交通事故により受傷 北米にて手術入院
2009.7	東京厚生年金病院に転院
2009.8	広島市立総合リハビリテーションセンターに転院
2011.1	医療リハに転院
2010.11	職業リハに入所
2012.9	流通会社に勤務 (コンピュータ業務) 実家より通勤
2015.8	一人暮らしを始める
2016.5	電話交換手として病院に勤務

Interview

インタビュー

【近況】

現在 病院の電話交換手として働いています。趣味として、水泳に陶芸、旅行、ボランティアそれ以外にも、やりたい事が、見つければ貪欲にチャレンジし、更に面白い事はないか探し続けています。

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

自分が納得いくまでリハビリをし、今思えば ある程度何が出来、何が出来ないのか、体と向き合う時間を過ごせたこと。同じ障がいを持ち悩みを抱え理解し合える友達に出会えたこと。親身なって相談に乗ってくれる人が、いてくれたこと。

【今後、当センターに望むこと】

私のような人達のために、これからもセンターの維持継続を望みます。

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

出来ない事をなげかず、過去の自分は良い思い出として、今の自分にできる事を楽しむ！今も私のモットーです。引きこもらず、どんどん外に出ているんな人と出会い、話し、経験をして 人生を充実させて下さい。車椅子だから出来ないと思わず、工夫次第で挑戦あるのみ。

【その他、リハビリテーションに関して思っていること】

体の変化、心の変化に合わせ自分なりのリハビリのカタチを、常に前向きに考え行動できたらと思っています。



Role model:6

よしだ ゆう

吉田 有さん 昭和 63 年生まれ **脊髄損傷者 L1 レベル**

仕事中の事故で受傷し、2 か月後に中国労災病院から当センターへ転入院となりました。

復職を目標にリハビリテーション治療が開始され、入院中には職業リハビリテーションセンターでOA講習を受講し、模擬的な職業訓練を体験されました。

本入所も検討していましたが、脊髄損傷者用歩行アシスト装置を用いた歩行訓練がきっかけになり、その販売会社へ就職が決まりました。

現在は引き続き事務職兼デモンストレーターとして勤務されています。

年 月	出来事
2013.12	配達のアバイト中に荷物の下敷きになり受傷 腰髄の完全損傷と診断される 広島県呉市の病院に入院、手術
2014.2	医療リハに転入院
2015.3	医療リハ退院
2015.5	安川電機に就職 事務職兼、ReWalkのデモンストレーターとして勤務

Interview

インタビュー

【近況】

医療リハに入院後、リハビリに励みADLが自立してきた頃に歩行アシストロボットReWalkと出会いました。今は日本でのReWalkの販売元である安川電機に入社し、主にデスクワークに従事して展示会等がある際にReWalkのデモンストレーションを行っています。

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

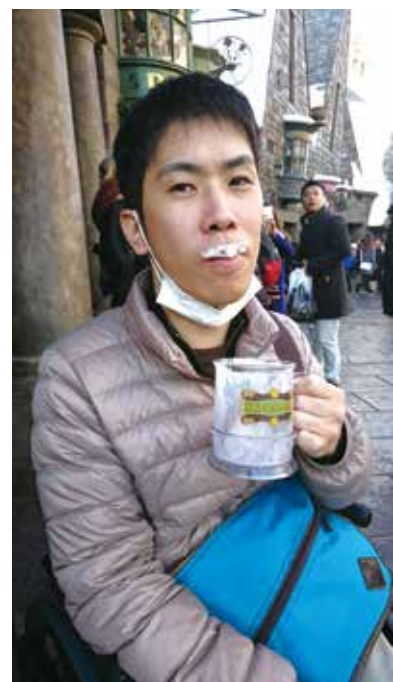
同年代の患者さんがいたことが色々な意味で力になったと思います。脊髄損傷になったことで落ち込むことも沢山ありましたが、同じような症状で年齢も近い人たちと話をすることで気分が楽になりリハビリに励むことができました。ベッドに引きこもりがちだった僕を外に連れ出してくれたりもしました。

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

今はまだ気持ちの整理がついていないことと思います。「これから先の人生どうなるんだ…」とか考えこんで寝られなくなる事もあるでしょう、僕もありました。でもまあ意外と何とかなるものですよ！まずは吉備リハで心と身体のリハビリに励んでください！！これから先のことは落ち着いてからゆっくり考えていきましょう。

【その他、リハビリテーションに関して思っていること】

退院してからの自主的なリハビリって中々難しいものですね！！



藤原 智貴さん 昭和 49 年生まれ 脊髄損傷者(頸髄損傷者) C6 レベル

サーフィン中の事故により受傷し、当センターでリハビリテーション医療を受け社会復帰しました。

飲食店の経営だけでなく、通信販売や商品企画の会社を立ち上げ、忙しい日々を送っておられます。

サーフィンも再開し、ワールドサーフィンコンテスト(障がい者サーフィン世界大会)の2017年日本代表候補にも選ばれトレーニングにも励まれています。

昨年、岡山県第1号の介助犬ユーザーとなり、介助犬「ダイキチ」と共にいろいろな場所で活躍されています。

年 月	出 来 事
2009.6	サーフィン中の事故により受傷 第5頸椎粉碎骨折による頸髄損傷 鳥取医大付属病院で緊急手術、入院
二週間後	肺塞栓症発症による心肺停止、蘇生
2009.8	川崎病院転院、褥瘡ができる
2009.9	医療リハ転院 重度の褥瘡があった 為本格的なリハビリは3ヵ月後
2010.12	医療リハ退院、家庭復帰
2017.2	岡山県介助犬ユーザーとなり、介助犬 ダイキチを迎える
現在	株式会社みつば(飲食店経営)代表取締役社長 合同会社岡山の才(通信販売、商品企画、飲食店経営)代表 2017ワールドアダプティブサーフィン コンテスト日本代表候補

Interview
インタビュー

【近況】

怪我をする前から経営していた株式会社みつばの店舗展開をはじめ、通信販売と商品企画の会社を退院後に立ち上げ、地元岡山のために日々走り回っています。また、怪我の原因となったサーフィンを退院後も続け2015年から始まったワールドサーフィンコンテスト(障がい者サーフィン世界大会)の2017年日本代表候補に選ばれました。

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

急性期では悪くなる一方だった褥瘡も医療リハに来てからは順調に治り、専門の病院は違うなと実感しました。本格的にリハビリが出来るようになってからは、経験豊富な先生方のおかげで自立も早かったと思います。同じ境遇の方が多いのもプラスになることが多かったです。

【今後、当センターに望むこと】

今までのように医療リハビリの最先端でい続けて欲しいですね。それから、介助犬の受け入れ態勢や啓発活動なども連携して一緒にやっていけたらと思います。セラピー犬なども取り入れて欲しいですね。

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

障がいを持つことは不便ですが不幸ではないです。私は障がいを持つてからのほうが幸福感は強いです。その一番の理由は『気づき』だと思います。怪我をしてからは気づきの連続で、当たり前のことが本当に幸せなんだときづかされました。結局、現状に幸せを感じられなければどのような状況にいても同じだなとも思います。

【その他、リハビリテーションに関して思っていること】

無駄なリハビリなんてないと思いますが、一般的なリハビリを行うと共にリアルな生活の状況をイメージしたリハビリを追究して欲しいですね。例えば、私は家に帰ったら妻と一緒に寝るため電動のベッドは使用しない、ベッドでご飯を食べないので必ず車椅子で食べるなどです。そのおかげで退院してから何も困ることがなかったです。



介助犬とお出かけ



ダイキチと一緒に



サーフィン中

毛利 公一さん 昭和 56 年生まれ **脊髄損傷者(頸髄損傷者) C3 レベル**

大学在学中アメリカに留学していた時に、海に飛び込んだ際に受傷しました。

受傷して半月後チャーター機で香川労災病院に転院、1年半のリハビリの後に当センターに転院となりました。

当センターでは、ご両親の熱意のある支援の下で積極的にリハビリ訓練を行い、家庭復帰となりました。

当センター入院中には、研究員と共同でマウス「ミレット」を開発し、現在、日本中の多くの頸髄損傷者が使用しています。

2008年にNPO法人ラーフを設立、現在、社会福祉法人ラーフの理事長や全国脊髄損傷者連合会香川県支部長として活躍され、各団体での講演活動もおこなわれています。

年 月	出来事
2004.7	アメリカカリフォルニア州ラグナビーチで受傷
2007.10	講演活動を始める。テーマ「よく生きる」
2008.3	NPO法人ラーフ設立
2010.12	香川頸髄損傷者連絡会 会長就任
2013.3	社会福祉士、精神保健福祉士の国家試験合格
2013.4	香川障がいフォーラム 副代表就任
2013.5	全国脊髄損傷者連合会香川県支部支部長就任
2013.5	香川県ソーシャルワーカー協会理事
2014.7	青年版国民栄誉賞人間力大賞準グランプリ、全国知事会会長奨励賞、衆議院議員議長奨励賞を受賞
2015.4	結婚 香川県障がい者スポーツ指導者協議会理事就任
2015.6	社会福祉法人ラーフ設立
2015.7	『夢をかなえる挑壁思考』を出版
2017.3	香川県パラ陸上競技協会理事就任

Interview インタビュー

【近況】

NPO法人ラーフとして立ち上がり、日本国内でも例のない NPO 法人から社会福祉法人化を成し遂げたラーフが、10年前の活動をスタートしています。経營業務の最中、リハビリも毎日かせません。C3 頸損ですが、丸椅子に1人で座ることができるようになりました。

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

在宅復帰を目指していたあの頃は、住宅改修の知識もなく困っていました。しかし、こちらで一緒に改修に携わって頂き、約1年かけて作り上げた家は、今でも快適に生活できています。顎で使うマウスを共同開発できたことも良かったです。それで仕事やっています！

【今後、当センターに望むこと】

香川県でいる方も、医療リハの存在を知らない方が多くいます。積極的な広報活動でセンターの存在を知ってもらうことで、助かる方が増えると思います。入院してからの魅力をもっとアピールしてもらいたいです。(リハビリ内容、食事の味、余暇時間のこと等)

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

怪我をして間もない今は、辛いしんどい時期かもしれません。だからこそ「できるかもしれない方法」を考えてみてください。ポイントは、「〇〇があれば、～できる」という視点です。形は変わっても仕事も旅行も飲み会も…。僕でできる事があればご協力します。

【その他、リハビリテーションに関して思っていること】

最近、介護予防のための高齢者ジムが増えてきています。会費制のジムのよう、そこに行けばリハビリ(又はトレーニング)ができるというような物ができたらいいなと思います。リハビリ士さんに独立開業権が認められるとできるかもしれません。



講演風景



作業風景



Role model:9

あだち

さちこ

安達 幸子さん 昭和 61 年生まれ **左大腿切断**

作業中の事故により左大腿切断術を受け、大腿義足を作成しリハビリテーション治療を受け約 6 ヶ月で社会復帰されました。

義足での歩行訓練は、涙ぐましい努力で乗り越えました。

同時期に入院していた方達のムードメーカーであり、笑顔と笑い声の絶えない場を作っておられました。

退院後は職業復帰を果たし、持ち前の明るさと辛抱強さで社会生活をエンジョイされています。

年 月	出来事
2014.11	農作業中に草刈り機により左脚を負傷 津山市内の病院に入院
2014.12	左大腿切断術を津山市内の病院で受ける
2015.1	医療リハに入院 義足作成と歩行のリハビリテーションを行う
2015.6	医療リハを退院 家庭復帰
2015.8	職業復帰



義足は私の一部



上手に歩けます



私の大切な足



Interview

インタビュー

【近況】

医療リハを退院してから約2年が経ち、義足生活にも慣れてきました。当初よりも長距離を歩けるようになり、知人からも「上手に歩けるようになったね」と声をかけてもらえるのでうれしいです。会社では主にデスクワークなので支障はありませんが、家族・友人・会社、たくさんの人に支えられて生活しています。

【当センターに入院して良かったこと・悪かったこと】

自分に合ったペースでリハビリに取り組めたのが良かった。病院のスタッフも話しやすい方が多かったので、親身になって悩みや相談事に対応してくれた。すべてが初めてのことで不安も大きかったが、義肢装具士に義足の知識をわかりやすく教えてもらえてよかった。病院で出会った仲間ともたくさん泣いて、たくさん笑って、精神的にも支えられた。

【今後、当センターに望むこと】

長期入院ということもあるので、親しき仲にも礼儀ありだと思った。(関係性が)近いから良いということはあるが、適度な距離感も大切だと思う。

【あとに続く方々へのメッセージ・エール】

行動にうつすまえから諦めるのはもったいない！！「無理なんじゃないか」「だめなんじゃないか」は、やってみないとわからない。小さな目標からコツコツと頑張れば、それが大きな喜びに変わる日が絶対にやってくる！でもひとやすみも大事で自分を大いに甘やかしてあげるのも大切だと思う。

【その他、リハビリテーションに関して思っていること】

周りに同じ義足ユーザーがいないことから、もっと横とつながる情報や環境があればいいのになと思う。